

特別支援学校小学部「自立活動」における音楽的アプローチの有効性 ー“ピーチ姫をたすけよう!!”を題材としてー

和歌山大学教育学部 : 上野智子(研究代表)、菅 道子、山崎由可里
附属特別支援学校 : 小林 史、武内 藍、向井直樹、藪本安有美
教職大学院学生 : 上山佳子、宮本公美、竹中茉莉
アドバンスド・プログラム生: 島田裕代、鈴木美紀、中弥佳央里、平川雅之、
森 直美、山崎琴音

1. はじめに(共同研究の趣旨と経過)

「自立活動」は、「個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達のための基盤を培う」(2017(H29)年度改訂特別支援学校小学部・中学部学習指導要領第7章第1目標)ことを目的としている。従来、本学部附属特別支援学校小学部(以下、小学部)では、教育活動全般を通して、また、国語・算数を合わせた指導「ことば・かず」の中で「自立活動」を行ってきた。そして、3年前から、児童たちの実態をふまえ、教育課程の中に「自立活動」の時間を設定して指導するようになった。

本共同研究では、小学部教員、音楽教育学、障害児教育学の立場から「自立活動」の視点で授業実践を見る大学教員、教職大学院学生、アドバンスド・プログラム学生と連携し、特に音楽の要素を活用した「自立活動」の教材づくり・授業づくりを検討することとした。

「自立活動」において音楽を活用する理由は、「自立活動」の指導内容の6区分①健康の保持、②心理的安定、③人間関係の形成、④環境の把握、⑤身体の動き、⑥コミュニケーション、が音楽の有する機能と共通性をもっていると捉えたからである。

過年度の本研究からは、「自立活動」の指導における音楽の有する機能は、各区分の項目に関係する力を高めることが確認できた。具体的には、音楽を用いることにより、様々な感覚への刺激となること、認知の機能を高めること、ルール等を心地よい活動から理解できること、心理的な開放感や達成感が味わえること、他者とのコミュニケーションの糸口になること等である。2021(R3)年度の研究も、昨年度の成果と課題を踏まえつつ、進めている。

本年度は、9月に大学教員と教職大学院学生、アドバンスド・プログラム生が授業を参観、カンファレンスを行い、メール等で協議を重ねながら授業を計画し、11月に連携による授業と再度カンファレンスを行った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、小学部教員と大学教員、教職大学院生、アドバンスプログラム生が共同で授業について計画・検討し、自立活動の授業における音楽の有効性を探る。また授業の充実、教材の工夫と改善を図ることである。

3. 9月14日(火) 授業参観(小学部3学級)&カンファレンス

大学教員、教職大学院学生、アドバンスド・プログラム生による「自立活動」の授業参観及びカンファレンスを行った。カンファレンスでは、低学年、中学年、高学年の各学級の担任から授業のねらいや取り組み内容について説明の後、質疑応答を行った。

カンファレンスでは、小学部の「自立活動」および当日の「自立活動」の授業について、小学部教員から以下の2点が報告された。

まず、どの学級においても「自立活動」の授業は集団で取り組むことが多い(授業の形態)。一方で、授業における課題設定および目標として、「自立活動」は個々の児童の実態からスタートし、個別のねらいや優先目標は何かということを意識する必要がある。小学部教員は、これらを意識して「自立活動」に取り組んでいる。

また、各学級における「自立活動」では、児童たちの実態をふまえ、「身体の動き」を重視し、粗大運動、微細運動等を取り入れることが多く、児童がボディイメージを高めたり、なめらかな動きを獲得することをねらっている。「身体の動き」を重視した取り組みでは、気持ちと身体の動きをつなげること、個々の生活の課題に関連させること、できるようになる喜びを感じられるようになること、動きの獲得の段階を追うことを大切にしていること等が報告された。

そして、大学教員及び教職大学院生、アドバンスド・プログラム生からは、集団で行うことで学び合いの姿がみられることが指摘された。それは、活動が遅れている児童を応援したり、息を合わせて動いたり児童全員で活動を作り上げる姿であり、とても素晴らしいといった意見が出された。また音楽的な要素を取り入れた活動の可能性についての意見も出された。

今回の授業参観を参考に、小学部低学年学級を対象として音楽を活用した「自立活動」の授業づくりを進めることにした。

4. 児童の実態及び課題

小学部の児童たちは、比較的知的障害の程度が軽度の傾向があるが、発達の、障害特性的には幅広い実態がある。

今回、授業を行った低学年児童5名は、友だちを意識することはできるが、自分の思いのままに行動してしまう等、発達のにはまだまだ自己中心的な面がある。

また、音楽の授業では、リズム打ち、歌唱や鑑賞、楽器合奏等で音楽の心地よさを感じている児童たちである。「自立活動」の視点から

見れば、自分の身体の動きをイメージすることがまだ難しく、動きがぎこちなかったり、普段の学習場面において、席について姿勢を正して注目したり、聞いたりすることが難しい等があげられる。一方で5人全員が興味のあることに対しては意欲的に参加したり、劇遊びでは登場人物になりきるなど見立てをしたり、ストーリーを楽しんだりすることができる。「自立活動」の課題は、当然ながら個々それぞれであり、担任が個別の指導計画に目標を掲げ、指導している。



写真1 学級での児童たちの様子

5. 授業の概要と経過

11月30日(火) 低学年「みんなで協力してピーチ姫をたすけよう!!」

大学教員、教職大学院生、アドバンスド・プログラム生による音楽的要素を取り入れた自立活動の授業を11月30日に行った。授業の概要は表1に示す。

表1 2021年11月30日の「自立活動」：みんなで協力してピーチ姫をたすけよう!!の概要

日時	2021(令和3)年11月30日(火)2限 10:25-11:10 小学部プレイルーム	
対象児童	小学部低学年5人(1年3名、2年2名)	
単元名	みんなで協力してピーチ姫をたすけよう!	
本時の目標	【ステージ①】音楽を聴いて自分の身体を調節する。 【ステージ②】友だちと音の重なりを感じながら一緒に演奏することで、表現することや達成感を感じる。	
	学習活動	ねらい
1. はじまりの挨拶		
2. 今日の予定の確認		ステージをクリアしてピーチ姫を助けることを理解する。
3. ステージ① 音を聴いて身体を動かす 1)練習 ♪〈マリオのテーマ〉の曲に合わせて動く ♪〈スター〉の曲になったら台にのぼる→とびおりる→ポーズ 2)2グループに分かれて発表する。		・音楽を聴いて、「歩く」「止まる」「ジャンプ」「ゆっくり歩く」「かけあし」の動きができる。 【身体の動き】 【環境の把握】
4. ステージ② みんなで楽器を演奏する ♪〈クッパ城へいこう〉 ・一緒に〈クッパ城へ行こう〉を演奏しよう! (バスブロックバー)...1年 使用音→レ・ミ・ラ (グロッケンシュピール)...2年 使用音→ミ・レ ・きれいな音をつくってピーチ姫を助けよう! (ラブドラム)...全員 ↓ ☆ピーチ姫が登場して、「助けてくれてありがとう」「みんなで戻りましょう」... ☆マリオ、ピーチ姫と一緒に児童は自分の椅子に戻る		・友だちと合わせて演奏できる。 【人間関係の形成】 ・教師の誘いかけに対して、楽器をならす。 【人間関係の形成】 【コミュニケーション】
5. 振り返り ・助けたピーチ姫から話を聞く		・がんばったことを発表できる。
6. おわりの挨拶		

※【】は自立活動の内容(6区分)

【児童の実態と単元の設定】

この授業では、指導目標として①外部からの情報を理解し、自分の動きに取り入れるという「環境の把握」「身体の動き」、また②他者と協働するという「人間関係の形成」「コミュニケーション」にねらいをあてて取り組んだ。

単元については、2 学期に入り児童たちの興味関心のあるスーパーマリオの世界をテーマに、悪者クッパからのミッションをクリアするという設定で進められていた。11 月 30 日の授業においても、児童にとって活動の動機付けとなるスーパーマリオをテーマとして踏襲することとした。

授業では、単元名を「みんなで協力してピーチ姫をたすけよう！！」とし、悪者クッパにさらわれたピーチ姫をスーパーマリオと一緒に助けにいくというストーリーの中で活動展開する流れを設定した。また本時では、音楽を聴いて自分の身体の動きを調整すること、また友だちとの音の重なりを感じながら一緒に楽器を演奏することで、表現することや達成感や心地よさを感じることを本時の目標とした。

【授業実践と児童たちの様子】

〈ステージ①の活動〉

ステージ①は悪者のクッパにさらわれたピーチ姫を助ける場面を設定し、「音を聴いて身体を動かす」活動を行った。具体的には、キーボードで演奏する《マリオのテーマ》の音楽を聴き分けて、「歩く」「止まる」「ジャンプ」「ゆっくり歩く」「かけあし」「しゃがむ」の動きを即時反応していく活動であった(写真 2)。

このような動作を取り入れた理由は、低学年学級の児童たちの実態として、片足立ちなど身体のバランスをとることやしゃがむことが難しいという課題があり、そのトレーニングに取り組むためであった。

本時における児童たちは、自分の苦手な動きであっても、マリオと一緒に取り組んでいた。また、動きに合わせた音楽を伴うことで、ドキドキわくわく感が高まるとともに、気持ちと動きをつなげ、自分の中に動きを取り入れようとする姿が見られた。

中には初めての取り組みや不安で動きが止まってしまう児童もいたが、マリオやそばにいる教師が声をかけたり、まわりの友だちが音楽に合わせて楽しく動いている様子に注目させたりすることで、だんだんと不安が和らぎ、身体が動いてくる様子が窺えた。

また、普段は動作や気持ちの切り替えに時間がかかりがちな児童たちも、ピアノの音を聴いて気持ちの切り替えをし、次の動きに向かうことができていた。

さらに、動きと動きの間に静寂の時間をとることで、児童たちの「あれ？何だろう」という気持ちを引き出し、聴く状態をつくることができた場面があった。このように、音のある状態、音のない状態を意識的につくることは、児童たちの聴く意識を高めることにつながった。また、児童たちは音楽を聴きわけて「しゃがむ」「跳ぶ」などの動作をし、主体的に動く様子が窺えた。

以上から、音楽の力で児童たちの気持ちをひっぱり、個の動きにつなげられることを改めて実感することができた。



写真 2 マリオと一緒に音を聴いて身体を動かす様子

〈ステージ②の活動〉

ステージ②は、さらわれたピーチ姫が囚われているクッパ城の門の鍵を開けるために、みんなで協力して楽器を奏でようという場面を設定し、「みんなで楽器を演奏する」の活動を行った。実際には《クッパ城へ行こう！》の第1テーマのメロディー〈クッパ城へ行こう、ラッタター、ラッタター〉に合わせて合奏（バスブロックパー、グロックンシュピール）をし、次に第2テーマのメロディー〈〇〇ちゃんの音で〉の問いかけの後に一人ずつ楽器ラブドラムの即興で応えるという活動、最後は〈きれいな音をつくってピーチ姫を助けよう！〉の問いかけに全員でラブドラムを奏でてピーチ姫の救済に成功するという活動であった（写真3）。

この学級の児童たちは普段から自己中心的な言動が多く、気持ちをひとつに合わせる活動がしにくいという様子がしばしば見受けられた。しかし、本活動ではピーチ姫を助けるために気持ちを合わせようとする様子が随所で見られた。特に、ラブドラムという楽器を演奏する場面では、今まで見たことも触ったことも、そして音も聴いたこともない楽器の魅力を感じられたようであった。ラブドラムを演奏する場面では、演奏している友だちに注目してわくわくしながら順番を待ったり、不思議な音を聞いて教師や友だちと視線を合わせ、気持ちを共有したり、きれいな音を奏でるために腕や手の動かし方を工夫したり、よく響く楽器の打面箇所を児童同士で声をかけ教え合う場面が見られた。このような他者を意識し合う児童たちの様子から、教師も参観者も楽器の持つ力を実感した。

また、バスブロックを使った合奏《クッパ城へ行こう！》の場面では、ピアノの演奏に合わせて楽器の音を鳴らすように促した。教師が声かけをしたり、動きの見本を示したりしたが、動きを合わせることはなかなか難しく、呼吸を合わせて音を出すというところまでには至らなかった。そのような中でも、それぞれが自由に表現することをとても楽しんでいる様子が見られた。最終的には、クッパ城の門が開き、無事にピーチ姫を助ける経験ができた。学習の振り返りの場面では、ピーチ姫から一人ひとりの頑張りを認めてもらうと同時に、「跳んだよ」等と児童自身も学習を振り返ることができていた（写真4）。

授業後のカンファレンスでは、ストーリー性を持たせたことや音楽を入れたことでの児童の意欲の高まり、授業の中での児童の変化、「自立活動」の授業で音楽を活用する可能性等について、話し合いが行われた。



写真3 きれいな音をつくってピーチ姫を助けようとする様子



写真4 ピーチ姫の話に耳を傾ける児童たち

6. まとめと今後に向けて

本研究は 3 年目となる。これまでの実践研究の積み重ねにより、「自立活動の指導」における音楽的なアプローチは、冒頭に記した「自立活動」の目的を達成する上で有効であることを検証しつつある。

今年度における、音楽的なアプローチを取り入れた「自立活動」の有効性として、次の 5 点が挙げられる。

- ①見て聴いて身体を動かす等、感覚を統合させることで認知の機能を高めること。
- ②音楽をきっかけに気持ちを高めたり切り替えたりと、情緒が安定すること。
- ③音を聴いて跳ぶ、しゃがむ等の大きな身体の動き(粗大運動)をしたり、きれいな音を出すために手指の動かし方(微細運動)を工夫したりというような、様々な身体の動きを引き出し高められること。
- ④教師や友だちと合奏をすることを通して、呼吸を合わせたり自分の気持ちを楽器で表現する等、コミュニケーションの機能を高めること。
- ⑤ルールや順番を守る場面を随時設定することで、児童同士が互いを意識し、社会性を高めること。

また、本研究を通して、音楽教育学および障害児教育学の大学教員、教職大学院生、アドバンスト・プログラム生、特別支援学校教員という、それぞれ異なる立場・視点から意見を出し合うことで、幅広い視野から、自立活動における課題へのさまざまなアプローチの方法について深めることができた。

今回、授業を行った児童たちは、身体の動き、コミュニケーションの状態や認知の特性、発達的な特徴等から、学習活動において困る場合が少なくない。これらの困難を改善・克服するためには「自立活動」は必須である。そして、今回のように「自立活動」に音楽的なアプローチを取り入れていくことは、児童の様々な困難を改善・克服する上で有効であることが明らかとなった。

今後の課題として以下の 3 点が挙げられる。まず、連携事業として残された課題は以下の 2 点である。第 1 に、コロナ禍ということから、1 回のみの授業参観となり、実態把握がままならないままの授業づくりとなってしまうこと、第 2 に、十分なカンファレンスの時間を確保できず、課題の共通理解が十分にできていなかったことが挙げられる。

加えて、授業評価に関する課題である。そもそも「自立活動」は個々の児童の実態把握をベースに目標・内容・方法を検討する必要があるけれども、今年度は個々の児童を意識した観点での授業評価が不十分であった。今後授業評価に関しても検討しなければならない。

次年度は、コロナ禍が解消していることを願い、もう少し早い段階で研究を進め、本研究での成果をもとに「自立活動」における音楽的なアプローチの有効性について、より深めていきたい。

7. 参考文献

- ・『マリオのキャラクター大集合図かん(ゲームひみつ図かん)』(2018)カドカワ。
- ・任天堂株式会社監修『ピアノソロやさしくひける New スーパーマリオブラザーズ Wii』(ピアノソロ/初級 楽譜)(2021)ヤマハミュージックメディア。